

序

故石井芙桑雄先生は、二〇一〇年六月にお亡くなりになりました。享年六四歳、二〇一一年にご退職を控えてのあまりに突然のことでありました。先生のご業績を紹介するにあたり、告別式において、私が御霊前に献げました弔辞を掲げておきたいと思います。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

立命館大学教授・石井芙桑雄先生、こんなに急なお別れになるとは、思いもよりませんでした。今年四月の第一回企画委員会で、未だ慣れない新執行部の不手際を的確にご指摘なされ、やはり頼りになる存在であり、今年一年色々とお世話になることと思ったばかりでした。そして、来年三月には立命館大学をご定年になる先生から、三十五年にわたる経験を色々とお聞きしたいと思っていたところでした。

先生は、上智大学ドイツ文学科から早稲田大学大学院に進まれ、博士課程を修了されました。学園紛争が全国を席卷している時期が先生の学生時代にあっており、それは後の先生の立命館大学でのさまざまな教育・役職経験に大いに役立ったことと推察します。早稲田大学大学院を一九七五年に終えられて直ちに立命館大学文学部助教授にご就任され、以後今日に至るまで三十五年間にわたる文学部教員として、文字どおり立命館一筋の人生であったと申せましょう。

石井先生は立命館大学に長く勤務されただけでなく、大学の教学・運営を何度も担われた方でありました。二度にわたる学生主事のお仕事をはじめ、現在は副学部長といっている学部主事、調査委員長という激職を全てお務めになり、全学的には大学協議員という要職にもあたられました。先生の事績として特筆すべきは、先生が立命館大学でのドイツ語をはじめとする外国語教育でリーダー的役割を果たされたことです。外国語教務主任を何度もお務めになったほか、国際センター長、言語教育研究センター長などを担われ、立命館大学の外国語教育へのご貢献は、ひときわ大きなものがありました。立命館大学で先生からドイツ語を学んだ学生は数知れず、分かりやすいが大変厳しい授業で有名でした。

先生のご研究の中心は、ゲオルク・ビューヒナーを中心とする三月革命期のドイツ文学であり、それに関するご論考が数多くありますが、文学のみならずヨーロッパ美術などにもご関心を有していらっしやいました。さらに先生のご関心はドイツ文学にとどまらず、広くフランス文学や日本文学にも及んでおります。そうした幅広い視点からのドイツ啓蒙主義文学研究で先生は大きな足跡を残されました。

先生は、常日頃から読書を趣味としており、晩年に至るまで「文学青年」の面影を有していらっしやったように思います。また、先生とは文学部のお仕事を何度かご一緒させていただきましたが、大変潔癖なお人柄からは強い印象を受けました。公平ではないことが大変お嫌い、厳格かつテキパキとした姿勢は、ドイツ風だったのでしょうか。いつも大変頼もしい先輩格の先生に、私は何度も甘えさせていただきました。タバコが大変お好きで、今はなくなった喫煙所で何度かお会いした折には、立命館三十五年の経験談をよく伺ったことが、楽しい思い出として残っております。

石井先生、恐らくは来年のご定年以降のご計画を色々とお持ちだったのではないのでしょうか。それを実現できず、さぞかしご無念であると思います。お教えを得たいことはまだまだ沢山ありましたが、残念です。ただ、今はもう、ゆっくりとお休みになりながら、私たち後進をお見守りください。心からご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一〇年六月七日 葬儀の日に

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

石井先生がお亡くなりになってから、半年の時間が流れましたが、今も折に触れて私どもは先生のことを思い出しております。私どもは、学部・大学の教育・研究に尽力することで、先生のご遺志に応えていきたいと思っております。

学校法人立命館は、石井先生に長年の立命館大学に対してのご貢献を讃え、名誉教授の称号を贈ることを決定しました。またこの度、本会は、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、先生にゆかりのある人たちの論考でもって論集を編み、先生に献呈いたします。あらためて心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一一年一月

立命館大学人文学会会長

文学部長 桂 島 宣 弘